

横濱叢書第四輯



はじめに

本書は、横濱叢書第四輯「舌栗毛 保土ヶ谷めぐり」（昭和八年・横濱郷土史研究会刊）の写本です。

「保土ヶ谷めぐり」は、保土ヶ谷の郷土史について書かれた諸本の中でも最も簡潔で分かり易く、わずかな時間で保土ヶ谷の歴史や伝承が一読できるたいへん重宝な本と言えます。しかしながらこの本の存在はあまり知られていません。また原本は印刷が古く活字も小さく極めて読みにくい体裁となっています。そこで「保土ヶ谷めぐり」がより多くの区民に読まれ、郷土の歴史に対する関心がいつそう深まることを期待して写本を作成しました。

写本作成にあたり、

漢字はできる限り常用漢字に改めました。

旧仮名遣いを新仮名遣いに改めました。

読みやすくするため一部ふりがなを付けました。

題字や文中の写真はそのまま複写しました。

退色の著しい表紙の版画絵（広重）は別途複写しました。

巻末の参考資料や年表は省略しました。

平成十三年二月二十三日

（PDF版制作 平成十八年二月十日）

写本編集者 飯塚 充

目次

保土ヶ谷区の現勢	5	大仙寺	16
史の変遷	5	外川神社	17
古代	6	道祖神	18
奈良平安朝	6	一里塚	19
榛谷御厨	7	街道並木	19
榛谷氏～北條氏～徳川氏	7	樹源寺	20
保土ヶ谷宿	7	権太坂	21
見付	7	留女	21
橘樹神社	8	境木	21
浅間寶寺	9	地藏堂	22
帷子橋	9	お鍋稻荷	23
帷子川	9	八幡神社	24
神明社縁起	10	菊水観音	24
香象院	11	福聚寺	24
見光寺	11	杉山神社(西久保町)	24
天徳院	12	御所台の井戸	25
大蓮寺	12	北向地藏	25
桜ヶ丘	13	大日本麦酒	25
遍照寺	14	法性寺	26
今井川	14	杉山神社(星川)	26
中之橋	14	正福院	27
刈部清兵衛悦甫	14	高根大権現	28
台場	15	釜檀山	24
問屋場	15	杉山社(上星川)	28
金沢鎌倉道	15	東光寺	29
其爪	15	正観寺	29
本陣	16	眞福寺	30

たたりげ ほんまのたたり

太郎冠者、次郎冠者旅のよそおひして

これは此のあたりに住む太郎冠者と「次郎冠者でござる。
今日は頼うた御方、いやこゝろよう御許されたによつて、
「兩人これより保土ヶ谷一見に出でばやと存ずる。」いか
に次郎冠者、息杖の代りとする竹の葉の滴りを忘れまい
ぞ、「支度がよくばさあ出かけようぞ、「さあ」

「さあ

道引

濡れてほす山路の菊の露のまに

千年のいのち延ぶるなる、秋はことさら面白そう、
野坂を越えてもみちする、昔をしのぶよすがぞと、
とり〜語る道すがら、はや保土ヶ谷に着きにけり、
はや保土ヶ谷につきにけり。

舌栗毛 保土ヶ谷めぐり

(太郎冠者と次郎冠者道中間答)

太郎冠者 「昔の道中のように水盃もなければ脚絆草鞋も不必要、千里一瞬の間に往来するのも昭和聖代のありがたさだ。さあ洪福寺前、電車停留所だ、下りよう。初めから文句をいうのじゃないが、保土ヶ谷区には電車線路は一つもない」

次郎冠者 「昔ならさしずめ保土ヶ谷宿領分の入口、即ち見付へ来たことになるんだね。そこで太郎冠者、これから保土ヶ谷一見と出掛ける前に、現勢を知って置く必要がある。それを一寸説明して貰いたいね」

太 「今の保土ヶ谷区の広さは、東西一里三町三十間(四・三〇六km)南北二十六町十二間(二・八三二km)周囲が六里三十二町(二七・〇二三km)で面積が一・二三万里(一八・九七一平方km)だ。横浜市全面積が八六八万里(一三三・八六七平方km)あるから比率一割四分に当り、即ち五区中の第四位となるわけだ。位置は誰も知ってる通り、市の西部を占めて北は都筑郡新治村と神奈川区へ、東は神奈川区と中区に連り、西は都筑郡二俣川村及都岡村に、南は中区と鎌倉郡川上村に接する、ところなるのだ」

次 「成るほど。序でに一寸此の区の史的変遷を聞きたいね」

太 「尤もな注文だが、詳しく言つてると日が暮れる。今流行の大スピードで話そう。四百五十年程以前は小田原の北条早雲の所領であった。徳川氏の世になってからは其の直轄地となって明治維新を迎えた。徳川家康が東海道の往還を開いてから、慶長六年には伝馬の継宿となり、慶安元年には街道を大体現今のように定めた。此の地は榛ヶ谷御厨庄に属して、旧本陣輕部三郎氏の家に残る慶長十四年の水帳に此の名称が載つてる筈だ。明治四年神奈川県の管轄、六年の区制制定で第二大区第一小区に編入、十一年の郡区町村編成には横浜区の管内にあった岡野新

田を編入、保土ヶ谷四ヶ岡野新田組合と改称して橘樹郡たちばなぐんに属した。明治二十二年（一八八七）が市町村制実施の時、保土ヶ谷区と更められて新たに宮川・矢崎の二ヶ村合併、保土ヶ谷町外二ヶ村組合となった。三十四年（一九〇一）に岡野新田は横浜市に編入、四十二年（一九〇七）には組合を廃して保土ヶ谷町と改称、四十四年今井川以東、岩間町の一部を横浜市に編入、昭和二年四月一日に横浜の隣接二町七ヶ村が合併されて、ここに都筑郡西谷村と一緒に市の仲間入をし、此の年の十月一日区制施行で旧町の区域を十三ヶ町に、旧西谷村の区域を二ヶ町に区画して今の保土ヶ谷区となったのだ。いわれといっぱ、まづ此の通り」

次「芝居掛りで来たね。

もう少し昔のことを聞

きたいもんだ、僕も

一番富樫左衛門尉とがしさえもんじょうを氣

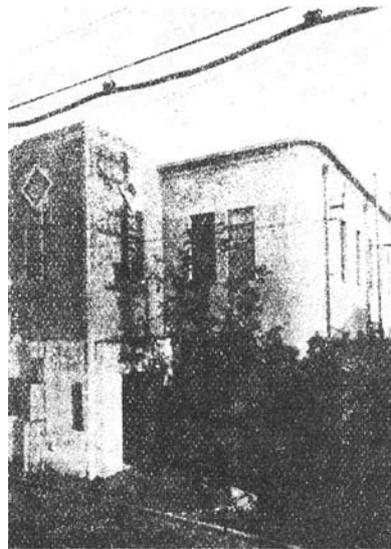
取って、事のついでに

問い申さんとゆくかね」

太「妙な声を出しちゃあ

いけない人が笑うよ。

この保土ヶ谷の地が



保土ヶ谷区役所

太古未開の頃から早く開けて、所謂原住民族がこのあたりの山野をかけ廻めぐっていたことは確かで、今日でも出る沢山の石器や土器が立派に之を証拠立しやうこ立たている。その後日本武尊やまとたけるのみことをはじめとして度々の東征とうせいで、この辺りあたにも皇化こうかが沾つい文化の曙光しやうこうが照てって、大和民族の移住おひおいが追々おひと増おして来たのである。ずっと下くだって奈良朝から平安朝時代にかけては、例の地方制度の整備、交通の発達、其の他文化的諸設備の発達で、此の地方の往来も相当に頻繁ひんぱんになつて来た。和名鈔わみやうしやうにある幡屋郷はたのやごうは、恐らくはこの保土ヶ谷辺りあたを含む地であつたろうと思える。交通の便はよし、五穀は豊穰、住民は敬神の念が厚い、三拍子揃そろうつた此の地が伊勢大神宮の

御領として寄進せられるようになったのも当然の事であったのだ。これが世に榛谷御厨と称えられるもので、この御厨から毎年白布三十疋が神宮に献ぜられたのだ。神戸の神明社はその時に建立された誠に由緒深い宮であるのだよ。それから頼朝の鎌倉時代となって此の地は榛谷氏の支配となり、榛谷氏が没落してから可成りの変転はあったが、南北朝時代には西園寺家の所領となつてゐる。更に下つて室町時代になると、記録がはっきり分かる様になつて来た。永祿年間(二五五八―六七)の小田原北條分限帳に保土ヶ谷の地名が出て来る。此の事から磯貝正君が、保土ヶ谷の地名が幡谷の郷名から榛谷の庄名となり、やがてそれが保土ヶ谷という地名が生まれたんだろうと、本年の春保土ヶ谷区役所で史談会があつた時大いに頑張つて居たつけ。僕も此の点には賛意を表するよ。それから天正(一九七)十八年徳川家康が関東に封を移してからの事は前に云つた通りだ。まあ保土ヶ谷の史的概観といえばこんなもんだ」

次「よく分かつた、いわれを聞けばありがたやだが、昔の保土ヶ谷は宿屋が七十幾軒があつて、上り下りの客や馬、非常に賑やかなもんだつたことは名所図会の絵や版画などで見てもよく想像される。今から考えるとまるで夢のようだね」

太「ちようど君と僕とを昔にかえした弥次北の膝栗毛にも、程ヶ谷の情調が表われている。二人が宿へかかると留女が大勢出て来て沢山の客を引張る。そこで弥次が

お泊まりはよい程ヶ谷ととめ女、戸塚までは離さざりけり
などと洒落てるじゃないか」

次「さあそろそろ歩きながら話そう。天王町の方へ向かつて行こうか。昔の見付は今の天王町三九五番地の所にあつた。宿役人などが此見付で大名や高貴な方々を迎えたというからね夢だね。見付から少々来たばかりで此の賑やかなことは驚くね。通りも広いし町並も美しいかにも保土ヶ谷銀座といわれるだけある」

太「町が繁昌するとすぐ何々銀座と来る。俺はあれは嫌いだ。歴史的に見ても無風流だろ。しかし銀座が無かったとしても銀貨を落とす処だらまあ勘弁はしてやる」

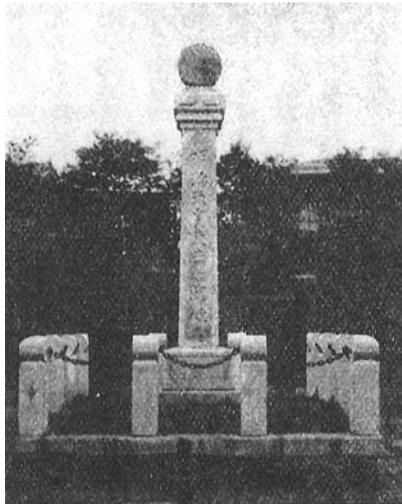
次「あは、は、は。昔は田浦で蛙が泳ぐ天然プールだったのが、富士紡が出現したお陰で、忽ちこうした繁華の地と変ったのだ。あの突当りが富士紡保土ヶ谷工場、男女三千百三十七人を使うというから凄いなあ。元の海道へ戻って十数間来ると左側に鎮守の橘樹神社がある、石鳥居を潜って参拝しよう」

太「御社は震災後の造営だが実に立派だ。区内第一の壮麗だろう。祭神は素盞鳴尊、次郎冠者此のお社のいわれを知っているか」

次「能弁比類無き太郎冠者のことなれば、拙に代わってお願ひ申す」

太「へんに賞めるなよ。

文治二年京都の祇園社から分霊を勧請、往古は



明治天皇東幸遺跡碑

宮ヶ坂という処に在ったのを万治三年海道の開通と同時に即ちこの地に遷座し奉る。以来帷子宿の鎮守として崇敬日に月に加わったが、火の禍あつてむざんや焼失、天保十三年時の代官関保右衛門、名主の刈部清兵衛以下に謀つて相州大山の木工棟梁八十八代手中明王太郎忠部敏景に命じて再興した。その時の費用一千二百両とある。この記念碑を見給え。昭和七年九月の建立だが、これは明治天皇御奠都の砌、内侍所奉安殿を造営せられた世にも尊い聖蹟なのだ。これを記念した碑石だよ」

次「尊い遺蹟だ。さて此の宮の御神体が川から上がったという伝説もあるというね」

太「ある。もと仏向村の淺間寶寺に鎮座したというが、度々戦で寺が破却され、神体は帷子川へ飛入つて穢れた時をお忍びになる。流れ流れて此の川岸へ着いたのを、御託宣あつて取揚げて祀つたということだ。其の因縁から神上り田の小字もあるのだ」

次「神体が上がつて神上がり田の説明もさる事ながら、僕は此の神へ捧げる新穀、即ち供米を作る神田だろうと考えるね。どうだろう」

太「恐らくそれが真実だろうよ。それから神体の正面に向うと神像から烈しい光がさして拜まれない、強いて拜もうとすると打倒れる、それほど荒神なのだ。そこで後向に安置されたなどは全く類の無い話だろう。始め三人の百姓が拾いあげた因縁で、宮の立替えや其の外の場合には此の三人の子孫が式を行う事に極めてあるということだ」

次「荒神だね。もし外の者がやると打倒されるだろうね。さあこれが帷子橋か。江戸名所図会以来のお馴染だけに姿形は変わつてもどうも懐かしいね」

太「太田持資の歌に

日ざかりは片肌ぬぎて旅人の、汗水になる帷子の里

道興准后は廻國雜記の中で

いつ来てか旅の衣をかへてまし、風うら寒き帷子の里

と詠んでいる。又、澤庵禪師は

地白なる霜のあしたはいかならん、夏ぞきて見む帷子の里

と諷詠した。其おもしろいやりがいいね」

次「俺ならばこうやる。

帷子のうすきものさへ無き我も、ほどがやすいと廻る世の中」

太「つまらない洒落は止し給え。此の帷子川は都筑郡の白根辺りから出て横浜駅附近で海に入るが、昔の川身は曲がりくねつて流れた為に、沿岸に田畑を持つ百姓は毎年のように水害を蒙つた、そこで川普請を歎願して享保十六年に川幅を拡げると同時に、川身を真直ぐに改修したの

で一時は水害を被らなかつたけれど、天明年間には押し流されて出る山土砂の為に河床が埋まり、享保以前と同じ状態になったので又々歎願騒ぎだ。時の代官伊奈半左衛門が察知して官費で以て河床の浚渫をやつたからずつと水の暴れるのも止まつたという事だ」

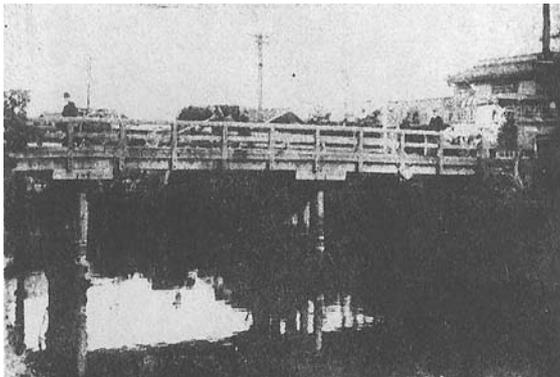
次「して見るとなかなか手数の掛つた川だね。橋を渡つて左に見えるのは、あれが保土ヶ谷区役所だ」

太「右へ出て星川町へ通ずる道路を行こう。約一町程先にほら老杉鬱蒼と見えるところがあつた。あれが神戸の神明社だ。これは頗る古い歴史のある社で、天文二十四年の縁起に天禄元年伊勢大神宮が武州御厨膳谷の峯に影向あり、それから川井へ又二俣川へと遷座、更に下保土ヶ谷宮林なる地に移つたので

八坂に祀つたが、嘉禄元年に神託あつて今の神戸に神明の下宮を建て、別当寺を満願寺と名づけた云々とあるから、少々混雑はしているが兎も角歴史が古くて昔から信仰の厚かつた事が分る。今の社殿は明治天皇御東行の御時、軽部清兵衛宅内に鳳輦奉置所を造営せられたその材料を、此社の修繕料にと下賜せられたとある。この一時でも注意する価値がある」



神戸の神明社



帷子橋

次「一拝して元来たところへ戻ると、神社から鳥居に向って右方の民家の
ある辺りが即ち満願寺の跡と聞いた」

太「うんその通り。もう真言宗香象院の前へ来た。創立は年代不明とある
が、天正十一年忠秀法印が中興したというから相当に古い。今回の展
覧会に出品されてる鎌倉時代の紺地金泥の大般若経五百六十の巻が発見
されて呼物の一つになってるから見落とさぬようにしよう。明治以前は
今の浅間町の浅間社の別当寺で、境内に神輿蔵などもあった。袖磨山富
士の人穴由来を記した浅間神社の縁起もここから出したものだ。本尊不
動明王は慈覚大師の作という。境内を一廻すると清墨庵先生の墓をはじ
めいろいろな感慨深い碑石がある。こういうところは隙さえあれば屹度
見廻るべきものだ」

次「垣一重を隔てて寺があるね。あれは」

太「浄土宗の見光寺だ。墓地には横浜地名案内の著者森田友昇の墓があ
る。此寺は寛永六年の創削、此の宿の茂平夫妻が江戸深川の靈巖寺珂山
上人の許にあつて剃髪して名を道意、貞壽と改め、上人から授けられた
弥陀像を今の地に安置して千日千夜の修行、満願の夜に此の像から白昼
の如き光明が放されたという。これを珂山上人に告げると因縁のある土
地らしい、一寺を建立すべしというので遂に一字を建て珂山院見光寺と
はいいい名ではないか」

次「時々仏像から白昼の如き光明の出る伝説があるが、どうも昔の像には
蓄電池でもあつたらしいな」

太「莫迦なことを言うもんじゃやない。信仰が深くなると俗人の眼には映ら
ぬ光明までが見えるものだ」

次「成る程な、此の辺りは寺が多いな、見光寺の裏手山際にもあれ高く瓦
が聳えて見える、あれも寺だろう」

太「曹洞宗の神戸山天徳院だ。天正元年に保土ヶ谷の豪族小野筑後守が華
林榮公和尚に帰依して建立した寺だ。維新前は神明社の別当寺をも兼ね

たこともあつた。見給え大きいだろう、だから今日では保土ヶ谷区内第一の伽藍となつている。什宝の中に地獄の有様を刻んだのがあるが、幾代前かの住職の手に成つたとかで何れ寺の事だから彼岸会の時などは盛んに勧善懲悪に用いられたであろう。本尊は地藏菩薩、その腹籠として一寸八分の雲慶作の地藏尊が納められる、これこそ小野筑後守の甲の中にあつたものでしような、戦場での功名もこの像に拠るといふので古くから崇敬が厚かつたという。面白いね」

次「地藏といえば温和な仏に考えられるがね、尤も勝軍地藏というのもあるからな。僕は又此の地藏尊がどういふものか餅を好かぬという伝説を聞いている。寺で餅を搗くと必ず住持が死ぬといふのはちと分からね話ではないか。ある和僧が禁を破つて餅を搗くとその夜のうちに頓死した。困つた本尊だね」

太「此の寺のすぐ後の高台にも寺があるよ。日蓮宗の妙栄山大蓮寺といつてね、山門の下に日蓮上人帷子里霊場の標を建ててある。上人が二十一歳で鎌倉へ遊学の時、途中である民家に泊まると其の子供が釈迦の像を玩具のようにして遊んでいる。そこで諄々と説聞かせて日蓮宗に改めさせ、其の像を持って出立した。あとで此の家が法華の道場となつたが、宗祖第一の帷子里宿泊場というのでこうした標を建てるようになったのだ」

次「昔の行者は到る処でそんな風に実践したものと見えるな、殊に日蓮はああした強気の僧だつたからね」

太「それからね、紀州南龍公の生母養珠院おまんの方がこの寺に詣つた時、宗祖の本像を寄進したり、庭に拓榴を植えたりして公の成長を祈られた、この木はもう枯死して今は若芽が生じて相当のものになって居る。また檀中から寄進した明珍作の甲冑は、寺には似合しくもないが稀に見る逸物、確かに寺宝として他へ自慢する価値はあるう。門前から天徳院前を過ぎて土橋へ行く迄の辺りを古町というが、万治以前の東海道の道筋

だったからこんな名が残るのだ」

次「寺の門前から僅に登ると広い坂路で、ああこれだ桜ヶ丘という高台は。やあいかにも桜が多いな。花の頃は横浜一の桜の名所というが、こうして紅葉するさまは又花よりも美しい。霜葉二月の花よりも紅なりというのは此の事だろう。それに寺を潜つて桜の名所だから一層気持ち清々する。そこで一首

嬉しさも悲しみも皆くくりぬけ

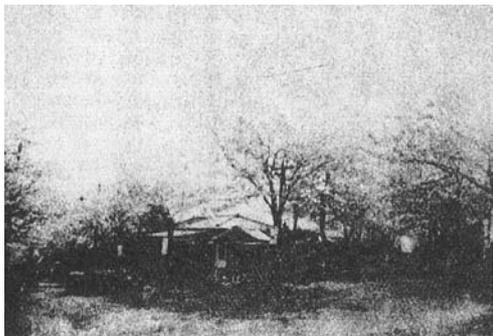
花と紅葉の丘にたたずむ

太「あつさりと気持ちよさそうだね。住宅が沢山並んでる、見給え市立実科女学校を囲んでの桜、それから通路の両側がトンネルになって高台に来る人の顔が皆桜の色になろうという

名所だ」

次「それに芳香も頼に上るだろうしね」

太「勿論の事だ。それからあすこに見えるのが浴風会の横浜分園だよ。浴風会というのは恩賜金をはじめ各宮殿下の御下賜金を基として、扶養者の無い六十歳以上の者や、不具廃疾者を収容する処だ。高台で空気はよし、春は花、海も見えれば富士も眺められる、こんなよい処で余生を送る事が出来るとは、ほんとうに有り難い事だなあ」



桜ヶ丘

次「僕も其の内厄介になるかなあー」

太「心細い事を云い給うな。社会事業といえ、保土ヶ谷には中々沢山あるよ。不良少年を収容する自彊舎もあれば、肺疾病者を容れる市立療養院もある。其の外、」

次「いやだいやだもう止めてくれ、だんだん滅入つて了う。お寺の方がい

くら良いか知れないサア歩こう」

太「よし、又お寺に行くのだよ、ほら坂の登り口左に真言宗の
医王山遍照寺があるよ」

次「ちや又お寺か。さらばいわれを聞き申そうか」

太「そう改まっちゃ困る。貞観十八年に真雅僧正の開創というから古い
だろう。本尊は薬師如来、これは弘法大師作とて昔仏向の浅間寶寺破却
の際、帷子川へ流されたのが流れ着いてやはりこの川岸で拾われ、寺の
本尊になったとの伝説もある。似た話だね」

次「よくもこう似たもんだ。よほど川に縁があつたんだ」

太「寺と隣合つて程ヶ谷小学校、此の学校は又区内最古という事だ。さあ
此所から再び海道を出てあと戻りをして見よう」

次「警察署の右横から道を横切り、天徳院の前から神明の門前、それから
土橋の付近へと来たんだね、此の間には昔、今井川が流れていたとい
うではないか」

太「そうだ。其の今井川については区民が忘れてはならぬ大事な歴史があ
るんだよ。というのはね、此の川は今から七八十年前までは保土ヶ谷の
中之橋から往来を横切つて天徳院前を流れて帷子川に合していた。こう
河身が屈曲した関係から二三日雨が降るとすぐ氾濫する始末、実に宿内
の痛事であつた。ここで名主刈部清兵衛（悦甫といつた人）翁がこの
難儀を察して再三幕府へ歎願したが、何せよ金が掛かるからおおいそれと
承知しない。さりとて此の事成就せねば永久に水害を免れることが出
来ぬ。そこで弘化四年頃から宿内の人々と相談して此の費用を積立る
ことにした。一兩年のうちに百両余の金が出来たが、これでは到底四百
両もある堀割が実現する筈はない。そこで中之橋を一度架替える金と
二百両を二十年賦で貸して貰いたいと翁から再び願出る、なかなか許可
せぬ、幕府の手を待っているのは新川は堀られぬから、一切を宿内の費用
でやろうと決心し、遂に嘉永六年から七年にかけて新川開鑿を成功した